【秋（どんぐり・黒大豆・サツマイモ等）】

実践①　4歳児　（どんぐり拾い）

園外保育に行き、どんぐりをいっぱい拾ってきた。「どんぐり転がしを作りたい」と友だちと一緒に筒や樋を使ってコースを作り始めた。「ここととここをつなげよ」「ここをスタートにしよ」とみんなで考えたコースが出来ると、子ども達は次々とどんぐりを転がし始め、自分たちで作ったコースをどんぐりが転がっていくことを喜んでいた。

ところが、トンネルを作りたいと筒を付けたが、トンネルの中でどんぐりが止まってしまい、どうしたらスムーズに転がるのか考えたり、また、樋とつなげたところでどんぐりが詰まってしまい“なんでかな”“テープがあかんのかな”と友だちと考えを出し合ったりして最後までどんぐりが転がる方法を試行錯誤していた。

また、ゴールに据えるものをカップにしたらいいのか、何か音がするものにしたら面白いと空き缶や鉄琴を置いて見たりしている子もいた。園外保育で丹波の森公苑に自然体験に行った時、指導員さんが木琴をゴールにしておられたことがヒントになった。

（成果）

・どんぐりをより確実に転がすためにどうしたらいいのか試行錯誤を繰り返し友だちと一緒に考えたり、考えたことをやってみたり、よく転がるコースを作ろうと同じ目的にむかって、友だちと思いを共有しながら遊びを進めることができた。
・自分たちの作ったどんぐり転がしを、修理したり、改善したりしながら、繰り返し友だちと楽しむことができた。
・丹波の森公苑の自然体験で教えてもらったこと、経験したことを自分たちの遊びに取り入れることでより遊びが面白い遊びに発展していった。

実践②　（どんぐり遊び）

クラスごとにどんぐりに親しみを持ち、遊びが広がっていく中、“隣のクラスはこんなことをしている”と互いに興味を持ち始め、両クラスみんなで話し合った結果、学年合同で４つのグループに分かれてどんぐりを使ったお店屋さんをすることになった。

保育者は、この活動を通して子ども達が自分の思いを相手に伝えること、同じ目的に向かってイメージを共有していくことを大切に考えていた。それぞれのグループで店の名前、どんな素材を使って作っていくのか等意見を出し合い、共通のイメージを持ちながら同じグループの友だちと一緒に一つのお店を作ることに取り組み始める。

そして、最終的には他クラスにも呼びかけ『お客さんとしてみんなに来てほしい』という目的を持って作り上げていった。看板作りでは文字を書ける子から書けない子まで“書きたい！”と文字に興味を持ち、あいうえお表を見ながら真剣に書いていた。お店屋さんがオープンすると、子ども達はお店屋さんとしてなりきり、「いらっしゃいませ」、「やすいですよ」等の呼び込みから年下の友だちには目線を合わせるようにしゃがみ「これいる？」、「〇〇が

持って行ってあげるな」と言葉や仕草から労りの気持ちも育っている。“いっぱい来てくれたな～”、“〇〇くんの買ってくれちゃったで”と友だちと喜びを共有する姿も見られた。

みんなで同じ目的に向かって作り上げ、達成感を感じたことでより一層友だちとの仲が深まり、それ以後さらに友だちに興味・関心を持つようになっている。

実践③　（オナモニ）

10 月上旬、散歩中に“オナモミ”を見つけた。これまでの経験から、オナモミが服などにくっつくことを知っており、友だちとくっつけ合いながら遊ぶ様子が見られた。そのうち、くっつく素材とそうでない素材がわかりはじめ、いろいろな素材に投げて楽しんでいた。

同時に、昨年度に七夕会で楽しんだストラックアウトのような遊びが始まり、一部の子どもたちが「大きな布がほしい！」と、ストラックアウトづくりが始まった。さらに点数を書いた布を立てかけて、ストラックアウト屋さんが始まった。

年齢によって、距離を考えたり、点数を足して数えたり、お店屋さんになりきって楽しんだり、イメージを共有したり、ルールを考え合ったりしながら遊ぶ姿が見られるようになった。

実践④　（やってみたいを叶えよう！さつまいもクッキング大作戦！）

園で収穫したさつまいもを使って、どんな事がしたいか、子ども達で計画を立てました。子ども達だけで進められるよう、できるだけ教師は介入せず、任せました。“何を作るか？”から始まり、材料は何が必要か、どうやって材料を調達するか、どこに買いに行くかなど、自分達の経験をもとに、案を出していきました。そして、分からない時には、「今日お母さんに聞いてくるわ」と家庭の力も借りながら、何日もかかって計画は進んでいきました。

材料は、近くの食料品店に買いに行くことにしました。買い忘れのないように、年長児を中心に何度も確認していました。作り方も保護者の方と調べてきた園児のレシピを参考にして作り、美味しい『さつまいもジャムワッフル』が完成しました。

（成果）

自分の思いや、家で調べてきたことを友達に伝え、話し合いを進めていました。食料品店に実際に買いに行くことで、社会生活とのつながりを学んだり、何をいくつ買うかなど、数にも関心を深めたりすることができました。自分達で考えたことが実現できた喜びを味わい、大きな達成感を感じていました。これからも、子ども達の主体性を大切に、“やってみたい！”の気持ちに寄り添い、環境を工夫していきたいと思います。

実践⑤　（これは何かな？どうやって作ろう？色水遊びは楽しいな♪）

小学校の校庭にある木の下に不思議な木の実を見つけた子ども達。「これ何？」と不思議そうな顔をして教師のところへ持ってきました。「何だろう？調べてみよう！」と図鑑で調べるとザクロだということが分かりました。「ザクロって食べられるんやで！」と知っている子もおり、実を包丁で切ってみました。中身は赤い実がギッシリ！一粒口にすると時期が早いのもあってか酸味が強かったので、食用でなく遊びに使うことになりました。

最初は、粒を使って色水遊びをしていた子ども達ですが、すぐに切った分の粒がなくなってしまいました。「今日の分は２つだよ」と言って見守っていると、皮を擦り出す子や叩いて潰す子がでてきました。また、オモチャの包丁を使ってもう一つの実を切ろうとする子もでてきました。実は少し硬いので、子ども達には少し難しいかと思いましたが、隣で実が動かないように支える子や切る様子を見守り「ここの穴に包丁の先を入れたら？」と声を掛ける子もおり、役割分担しながら力を合わせて真剣に作業していました。何とか包丁で切れるとホッとした表情。みんなで少しずつ分け合って使い、ザクロジュース屋さんができました。

（成果）

素材に合わせて、道具の使い方や作り方を子ども達なりに考えたり、使い分けたりできるようになりました。友だちの姿を見てヒントを得たり、協力や相談したりして遊びを進める姿も見られます。また、色の変化や水に入れたときの浮き・沈みの違いに気付いて、驚き・感動している姿も見られました。これらの姿から、“協同性”や“思考力の芽生え”の育ちを感じました。

実践⑥　（黒大豆の房遊び）

幼稚園の畑で育てた黒大豆を収穫し、みんなで食べたあとに実がついていない房を置いていると、「先生！これ使って遊んでいい？」とA児が尋ねてきたので、房を渡すと房遊びが始まった。

葉っぱや茎を使ってごちそう作りをしたり、葉っぱに穴を開けてお面を作ったりと思い思いに遊んでいた。そこへB児がやってきて、「これをあそこに全部かけて！」と房を藤棚の端から端まで吊るしかけてほしいと要望してきた。どうやって遊ぶのかを見ていると、房の下を歩いたり、くぐったりを繰り返して遊んでいた。しばらくその遊びが続いていたが、A児の「おばけやしき作りたい！」の一言でおばけやしき作りが始まり、吊るした房におばけをつけたり、おばけ役とお客さん役に分かれたりして遊びが盛り上がった。

黒豆を収穫し、実のない房には興味はないだろうと思っていたが、子どもの一言から遊びが広がった。日々の保育の中で、見て・触って・確かめて・考え合うことがどんどんできるようになる。その中で友達と一緒に作りあげていく喜びや達成感を得て、子ども達はどんどん意欲的になってくる。そうした中で、子どもの好奇心や探求心が発揮されるような環境や働きかけを考えていかなければならない。

実践⑦　（サツマイモ）

そろそろ収穫したサツマイモを食べようと思っていたところ、子どもたちから「お芋食べよう！」「焼き芋しよう！」「みんな（年長児）で焼き芋して、年少さんを驚かせよう！」という意見が出た。そこで、年少児には秘密で焼き芋の計画を立て、年少児に焼き芋を食べさせてあげよう！ということになった。

子どもたちは、いつする？何を準備する？芋が焼けるのを待っている間はどうする？など、当日の焼き芋ができるまでの流れを想像し、イメージを共有しながら考えを出し合って計画を立て、友達と協力しながら準備を進めて行った。

計画を立てている途中、「お芋は何個焼くの？」という話になった。「年少さんと先生と、小学校の〇〇先生も食べさせてあげようよ！」「そやな、綱引き一緒にしたもんね」と子どもたちが言う中、A 児「先生はあかん！先生が食べたらなくなるからあかん！」と言い出した。そして他の子の意見を受け入れず、折り合いが付かなかった。するとB 児が「芋が何個あるか数えたら？」と提案し、みんなで数えることにした。すると全部で７０個ほどあった。A 児は年少、年長、教師など全員が食べられることを確認して「先生も食べていいよ」と言った。しかし、このまま終わらせるのではなく、A 児にはもう一度考えるチャンスを与えたいと思い「７０個あったけど、もし２０個しかなかったらどうするの？」と尋ねてみた。しばらく沈黙が続いたので、「先生は大人やから我慢するよ。でも、年少さんにも我慢してと言うの？」と尋ねと、「それはあかん」と子どもたちが答えた。その中、A 児は「我慢してもらう」と答える。そこで「A くん、どうしても焼き芋が食べたいんだね。でも逆に、年少さんに食べさせてあげるから、年長さんは我慢して！と言われたらどうする？」と聞くと、A 児はしばらく考えて「それはいやだ」と答えた。「じゃ、どうしたらよいかな～？」と改めて子どもたちに聞くと、C 児が「わけっこしたら？半分にしたらいいねん」と答えた。周りの子も「それがいい！」と言った。そこで、A 児に「A くん、どうする？」と聞くと「・・・分けてあげる」と小さな声で言い、「だって、僕もわけっこしてもらえへんかったらいややもん」と答えた。「そうか、分けてくれるんやね。ありがとう。」と A 児の気持ちを受け止めた。

その日の給食の後、A 児が「先生も焼き芋食べていいよ」と側に来て言い、焼き芋当日は、朝から芋を洗いながら A 児が「先生、焼き芋はやっぱりみんなでする方がいいわ。」と笑顔で言った。

この遊びを通して、友達と考えを出し合って相談したり、協力したりする大切さや、自分たちが考えたことを成功させる楽しさや喜び、満足感を味わうことができた。そして A 児の発言により“自分だけよければそれでよいのか、みんなのことを考えるとはどういうことなのか、また、分け合うことのうれしさ”などを具体的に考え学ぶ機会になった。

実践⑧（ごっこ遊び）

秋には各クラスお店屋さんやおまつり、お話を活用したりしてのごっこ遊びを楽しんでい

ます。それぞれの学年、クラスの子どもたちの興味や関心を探りながら遊びの方向性を考えています。５歳児ではどんなものが必要か、どんなものをどうやって作るか等も自分たちで話し合い、みんなで遊びをつくり上げていく楽しさや達成感を感じられるようにしています。